

ライブラリー・ウィズアウト・ウォールズ

「情報発信基地としての図書館と情報ナビゲーターとしての司書」

安藏 伸治^E

ここ数年来のコンピュータネットワークの発達と普及は、大学における教育・研究環境のみならず、大学生活それ自体を大きく変えようとしている。特に米国の大学においては、大学に関わるすべての人々、つまり学生、教員、職員、そして卒業生や入学希望者にいたるまで、ネットワークを介して「大学」という世界にアクセスしてくるのである。コンピュータネットワークなしに、アメリカにおける大学生活は成立しえない状況になっているといえよう。図書館も例外ではない。いや、図書館こそがこうしたコンピュータネットワークに情報を提供する中心的な役割を担っているのである。「The Library without Walls」あるいは「The Digital Cybrary」と呼ばれ、空間的にかつ時間的に壁のない、いつでもどこからでも情報を検索し、取り出せる図書館が「仮想（ヴァチャル）」な存在ではなく「現実（アクチュアル）」なものとなってきているのである。そして図書館司書がその中心で活躍しているのである。

ヴァチャル・キャンパスの展開

本学もリバティタワーが竣工し、我が国でも最先端の情報環境を備えたビルで教員は講義を行い、学生は教育を受け、職員は仕事をすることとなった。数年後には図書館も新築され、まさに我が国でもっとも情報環境の整った大学として次世紀を迎えることになる。そのような環境ではいか

^Eあんぞう・しんじ／政治経済学部教授／人口学

なる大学生活が待ち受けているのであろうか。また21世紀の図書館にはどのような準備と整備や今後の設計が必要とされ、いかなる役割がもめられるのであろうか。本稿では今後の大学ならびに図書館の姿について考えていくことにする。

それにはアメリカの大学生活と現在の本学の学生生活を比較してみることがよかろう。本学の学生はキャンパスに着くとまず学部掲示板を見る。そこには時間割、教室変更、呼び出し情報、休講情報、各種手続きについての情報、奨学金、レポート、ゼミ関連の情報といったものが掲示されている。各自の必要とする事務手続きのために学部事務室をはじめとする各事務室、あるいは就職課の資料室などに足を運ぶ。新学期なら各学部の講義要項（シラバス集）、便覧、時間割、研究室、各種研究所、情報科学センター関連科目要項、ネットワーク利用についての冊子、語学関連の冊子、図書館の利用についての冊子等膨大な情報量の印刷物を入手し、一年間の学生生活をどう送っていくかの検討をしなければならない。講義が始まれば、時間割とシラバス集を参考に、講義内容、評価方法、教科書などを検討し履修すべきか否かを考え、各自の時間割を組むことになる。その他、「学園だより」や「明治大学広報」、「明大スポーツ」といった広報紙などが学内の様々なところで配布されている。

以上述べたように、大学という場所にはその中心である「教育・研究」それ以外に、教育・研究生活をおくるために必要な膨大な量の情報が存在している。それらは、各学部、短大、大学院、学生部、就職部、図書館などのさまざまな空間に固有の情報として存在し、学生と教員、職員はそれぞれ異なった利用をしている。こうした情報は、まさにマトリックスの形で分類・整理していくことができよう。利用者はそれぞれが属する行から対応する列にあたる場所の情報に接していくことになる。これまでの大学生活では、各空間に利用者が移動し、掲示物の形やパンフレット、資料、冊子などの形で情報を入手することになる。これらすべてを、実際に空間の移動をすることなく仮想空間の移動によって、つまりコンピュータ・ネットワークを介して自宅や職場にいながら得ることはできないのであろうか。明治大学の将来の展開として、社会人教育やリカレント教育、昼夜間大学院などが求められている。社会人としての生活と同時に学生として

の生活のふたつの生活を送ろうとするならば尚一層のこと、ヴァチャル・キャンパスの出現が切望されるのではなかろうか。

ホームページの意味

1996年度の長期在外研究員として12年ぶりにカリフォルニア州ロスアンゼルス市にある **University of Southern California(USC)** の **Population Research Laboratory** で研究生生活をおくった。ここには1979年7月から1985年2月まで大学院生として在籍していたので新旧の環境の変化を比較することができた。1985年の時点ではコンピュータ・ネットワークといえば大型計算機に電話回線で接続し、ライン・エディタという一行ずつ入力していく程度の端末が一般的であった。もちろんコンピュータ・センターにはフルスクリーン・エディタがあったが、それを利用するには研究所からコンピュータ・センターへの徒歩で30分の空間的な移動が必要であった。パソコンも普及しはじめていたが、もちろんネットワークでは繋がらず、もっぱらワードプロセッサとしての利用が中心であった。しかし、1996年の同じ大学は全く事情が異なっていたのである。1995年からは希望の如何にかかわらず教職員全員にパソコンが配布され、事務上のほとんどの手続きはネットワークを介して行われるようになり、私が着任した時には前述したような大学生活に必要な情報のほとんどが大学のホームページを通して得られるよう整備されていたのである。

学生はパソコンを所有している場合は大学に行く前に、自宅から電話回線で大学のネットワークにアクセスする。所有していない場合には、学内に数カ所あるユーザールームに行き、そこから大学のホームページを閲覧することになる。ホームページからは各学部情報、講義のシラバス、課題の提出、スポーツや公開講座や映画・演劇などのイベントのチェック、フットボールの試合のチケットの予約など、いままでは大学に来て行っていたほとんどの情報収集活動と事務手続きがネットワークを介して可能となっているのである。学生個人の成績、講座履修手続き、学位取得までのガイドラインやガイダンスなど個人に付随する情報は学籍番号とパスワードによって保護されているが、本人ならばそれらをネットワークで照会でき

るし、不明な点や疑問点はE-mailで担当者に問い合わせることも可能である。

卒業生は校友課のホームページで住所変更や勤務先情報の変更、校友会報やあらゆる大学の広報を閲覧することもできるし、受験生ならば受験手続きがネットワークで行うことができる。現在、米国のほとんどの大学において、受験手続きの半数以上はネットワークによって行われているのである。

大学のホームページには、わが国のほとんどの大学のように、大学案内のパンフレットを単純にデジタル化しただけではなく、学生や教職員、校友や入学希望者など大学に関連する人々に、さらにマスコミ関係などにまで必要とされる情報が盛り込まれている。筆者が今回渡米した1996年以降、各大学ともホームページのコンテンツの充実に努力しており、わずか2年の間にその内容は驚くべき発展を示している。例えば、UCLAでは1997年に文系学部の3,000講座のシラバスをデジタル化し、さらに全学生個人個人のホームページを用意した(<http://my.ucla.edu>)。学生が自分の暗証番号を入力し、自分のホームページを開くと本人の履修科目の時間割(履修科目をクリックするとそのシラバスにリンクしている)、メール、担当教員やアドバイザーとのアポイントメント、大学各部署へのリンク、広報紙やスポーツ紙、タウン・ガイド、レストラン案内、その他学外へのリンクなど、ひとりの学生が必要な情報はそのホームページからすべて得られるようになっている。

まさに、キャンパスがパソコンのディスプレイに再現されているわけであり、パソコンとコンピュータ・ネットワークなくしてアメリカの大学生生活は成り立たない状況になってきていると言ってよかろう。大学のホームページは、そこに生活する人々にとってまさにHOMEであり、すべての生活がホームページから始まるのである。

教育・研究とコンピュータ・ネットワーク

大学の本来の目的である「教育・研究」の分野においてはさらにネットワークの利用がすすんでいる。アメリカの大学のホームページに

は「Researcher's Resources(<http://www.usc.edu/academe/index.html>)」とか「University Libraries and Academic Information Resources(<http://www-sul.stanford.edu>)」という様々な名称のもと、「研究」ならびに「教育」に関する情報コンテンツが整備されている。その中には、図書館の蔵書カタログの検索システムは勿論のこと、要旨まで入った雑誌論文目録、個別のレファレンス・サービス、文系理系を問わず各種多様なデータベース(<http://www.usc.edu/isd/doc/statistics/databases/>ならびに<http://www-sul.stanford.edu/catdb/alldata.html>)、エレクトリック・ジャーナル、研究費や研究助成に関する情報(<http://www.usc.edu/dept/LAS/Research/>)、内外の官公庁ならびに国際機関からの資料、その他各種電子情報(<http://www.usc.edu/isd/elecresources/>)といった研究・教育活動に必要な情報のほとんどが網羅されている(<http://www.usc.edu/dept/source/>)。もちろん、インターネットの特性である時間と場所の壁を乗り越えた利用がなされるため、自分の大学のホームページに存在しない情報は他大学や外国の大学のホームページを利用したり、サーチエンジンを用いて検索することが当然のごとくおこなわれることになる。

アメリカの一流の大学は、教育・研究面における支援体制の一貫として、各大学独自のコンテンツを備えたウェブサイトをもっている。本稿読者の方は、是非上記のサイトをはじめ米国の主要大学のホームページをインターネットのブラウザで御覧いただきたい。それぞれの大学が争うようにホームページを充実させており、大学生活の各種情報だけでなく、教育・研究の支援システムと考えていることが理解いただけるはずである。

新しい図書館と司書の役割

こうしたウェブサイトを作成、管理、維持、そしてそのさらなる発展の中心となっているのが大学図書館、とくにレファレンスの部門である。またネットワーク利用者の情報にたいする多様な需要に答え、情報を供給していくのも図書館司書の重要な役割となりつつある。もちろん図書館本来の選書、購入、分類・整理、閲覧という業務は図書館や司書の重要な役割であることに変化はない。現在のような情報化された環境においては、大

学が所有する学術情報の蓄積・発信の他、教育・研究に関連する情報の所在であるリンク先を地域や国内外を問わず収集し、独自に整理し利用しやすいように提供していくことも新しい業務として求められているのである。さらに、本稿のはじめに述べたような、大学生活を快適に送る上での各種情報の交通整理にもアメリカの大学では図書館の情報司書（**Information Librarian**）が大きく関わっている。まさに書誌情報だけでなく、デジタル情報のナビゲーターとして司書が大活躍しているのである。

2年間在外研究で在籍した大学では、コンピュータやネットワーク利用のための各種講習会が本学のように設置されており、学生・教員・職員を問わず、学内のネットワーク利用資格をもつものは無料で受講することができるようになっている。各学期ごとに新しい講習会プログラムが用意され、その内容はコンピュータそのものに関するものから、いかに情報を検索するのかといったものへ、さらに情報発信の方法に重点が移行しているようである (<http://www.usc.edu/isd/publications/adventures/>)。WindowsやマッキントッシュやUNIXなどのオペレーティング・システムやPPP接続の方法などの講習はコンピュータセンターのコンサルタントが行っていたが、ホームページ作成などのインターネット・パブリッシングや人文科学、社会科学などの研究分野ごとのインターネットを利用した情報検索については司書が中心となり講習会を企画し、実施しているのである (<http://www.usc.edu/isd/publications/adventures/introduction.html>)。

こうした発達した情報環境のもと、図書館の利用の仕方も従来とは大きく変化してきている。本稿をお読みいただいている方々の多くは、純粋な読書というものは別として、書誌を読み、そこから得られる情報を収集・整理・分類していく時には常にパソコンを利用されていることであろう。以前のようにノートに手書きで記録したり、分類カードを利用するようなことはなく、ほとんどの方はワープロソフトであったり、表計算ソフトであったり、データベースソフト、エディターなどのソフトを活用しているのではなかろうか。つまり、パソコンがなくては知的生産活動ができないといった状況であると思われる。

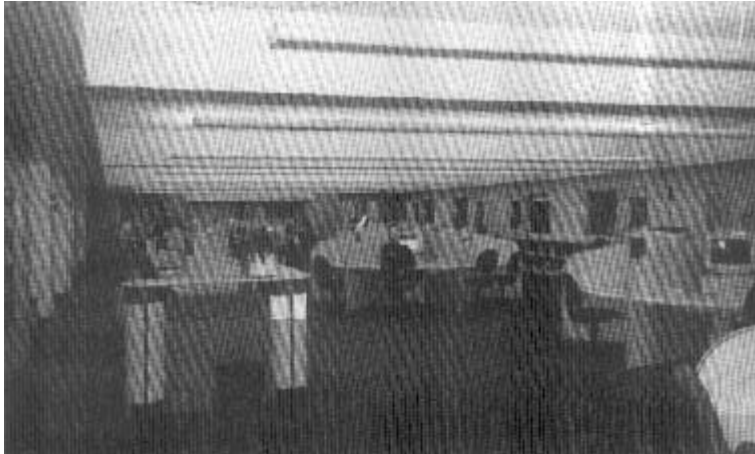
もともと、大学図書館は研究・教育のための「情報」を蓄積し、分類・整理し、利用しやすいように助言してくれる所である。また、勉学の「場」

としてのスペースも提供してしてくれる所であった。12年ぶりに米国の大学で生活してみて、一番驚いたのは勉学の「場」としての従来の閲覧スペースに学生や教員の姿をほとんど見ることができなかったことである。そのかわりに新しく建設された図書館の地下には、広大なスペースのコンピュータのユーザールームが設置されていた。そこにはネットワークに接続した最新のパソコンが並べられており、早朝と深夜を除くと常に満席の状態であった。学生達は比較的ゆったりした机の上に、書誌や資料を広げ、またディスプレイ上のデスクトップに資料を提示しながら論文やレポート作成をしていたのである。レポートが完成したならば、そのまま担当教員にメールで送ったり、自宅で続きをおこなうために自分のアドレスに送るようなことをしていた。となりににはプリントセンターがあり、そこでは有料で高品質のプリントアウトを得ることができる。

以下の写真はUniversity of Southern Californiaの18ヶ所の図書館のうち最新の図書館であるThe Thomas and Dorothy Leavey Library



USCのなかで最新の Leavey Library
(大学の他のビルと同じ意匠を採用している)



Leavey Libraryの地下にある Information Commons
(Windows, Mac, UNIX の最新機種をそなえている)

(<http://www.usc.edu/isd/locations/leavey/>) とその地下にある Information Commons とよばれるユーザールーム (http://www.usc.edu/isd/locations/leavey/Virtual/Walking/Ground_Floor/groundfloor.html) である。ここには、コンピュータやネットワークに関するコンサルタントが常駐している他、リサーチ・コンサルタントという役割の司書がおり、いかに効率的にコンピュータやネットワークを利用して研究のための情報収集を行うかを指導している (http://www.usc.edu/isd/locations/leavey/Virtual/Walking/Ground_Floor/rescon.html)。

おわりに

ネットワークが発達・普及すると、図書館はスタンド・アローンとして存在するだけではなく、他の図書館と連携して情報の相互交換をしたりするといったコンソーシアムの推進が重要となってくる。以前から USC と UCLA は同じ市内であるため図書館の相互利用がおこなえたが、ネットワークにより、市内といった地理的制限を越え、米国中のいろいろな大学や研究機関と情報の交換と共有ができるようになった。とくに統計資料や

研究用のデータベースについてはインターネットによる恩恵は計り知れないものがある。そうした資料やデータベースの所在や紹介、利用方法などについての教育や指導なども図書館の大きな役割の一つとなってきたのである。

「情報発信基地としての図書館」と「情報ナビゲーターとしての司書」は、今後ますます図書館や司書の重要な役割のなっていくことであろう。これまでは図書館の規模や、その蔵書数と司書の選書能力の如何が大学の質の一部として評価されてきた。しかし、これからはいかに有用かつ固有の情報コンテンツを発信できるか、またいかにそれらを利用しやすい状況にするかが大学図書館のみならず、大学それ自体の質を左右するのではなかろうか。図書館「情報」＝書誌情報という図式を越えたレベルの役割が情報化社会の図書館に強く求められていると言えよう。